あほう鳥の鳴く日

小川未明

青空文庫

若者は、小さいときから、両親のもとを離れました。そして諸所を流れ歩いていろいろな生活を送っていました。もはや、幾年も自分の生まれた故郷へは帰りませんでした。たとえ、それを思い出して、なつかしいと思っても、ただ生活のまにまに、その日その日を送らなければならなかったのであります。

もう、十七、八になりましたときに、彼は、ある南方の工場で働いていました。しかし、だれでもいつも健康で気持ちよく、暮らされるものではありません。この若者も病気にかかりました。

病気にかかって、いままでのように、よく働けなくなると、工場では、この若者に、金を払って雇っておくことを心よく思いませんでした。そしてとうとうある日のこと、若者に暇をやって工場から出してしまったのです。

べつに、頼るところのない若者は、やはり自ら、勤める口を探さなければなりませんでした。

彼は、それからというものは毎日、あてもなく、あちらの町こちらの町とさまよって、職を求めて歩いていました。

空の色のうす紅い、晩方のことでありました。彼は、疲れた足をひきずりながら、町の中を歩いてきますと、あちらに人がたかっていました。

何事があるのだろう？　と思って、若者はその人だかりのしているそばにいってみますと、汚らしい少年をみんながとりかこんでいるのであります。

「さあ、赤い鳥を呼んでみせろ。」と、一人がいいますと、また、あちらから、

「さあ、白い鳥を呼んでみせろ！」とどなりました。

汚らしいふうをした子供は黙って立っていました。

「どんな鳥でも呼んでみせるなんて、おまえは、うそをつくのだろう？　なんで、そんなことがおまえにできてたまるものか！」と、人々は口々にいって冷笑いました。

すると髪の毛の伸びた、顔色の黒い、目の落ちくぼんだ子供は、じろじろとみんなの顔を見まわしました。

「私は、けっして、うそをつきません。山にいて、いろいろほかの人間のできないことを修業しました。ほんとうに、みなさんが赤い鳥が呼んでほしいならば、どうか、私に、今夜泊まるだけの金をください。私は、すぐに呼んでみせましょう。」といいました。

群衆の中には、酒に酔った男がいました。

「ああ、呼んでみせろ！　もし、おまえが呼んでみせたら、いくらでも、ほしいほどの金をやるから。」といいました。

子供は、うなずいて、空を仰ぎました。雲はちぎれちぎれに高らかに飛んでいました。そして、日がまったく暮れてしまうのには、まだ間があったのです。

たちまち、鋭い口笛のひびきが子供の唇から起こりました。子供は、指を曲げてそれを口にあてると、息のつづくかぎり、吹きならしたのであります。

このとき、紅みがかった、西の空のかなたから、一点の黒い小さな影が雲をかすめて見えました。やがて、その黒い点は、だんだん大きくなって、みんなの頭の上の空に飛んできたのです。そして、あちらの町の建物の屋根に止まりました。

それは、夕暮れ方の太陽の光に照らされて、いっそう鮮かに赤い

毛色の見える、赤い鳥でありました。

「さあ、このように赤い鳥が飛んでまいりました。」と、子供はいいました。

「あんな遠くでは、赤い鳥だかなんだかわからない。もっと近く、あの鳥を呼んでみせろ！」と、酒に酔った男が叫びました。

子供は、ふたたび高らかに、口笛を吹き鳴らしました。すると、赤い鳥は、すぐみんなの頭の上の電信柱にきて止まりました。

「おい、あの鳥を手に捕まえてみせろ。」と、このとき、見ていた一人がいいました。

「私には、あの鳥を捕まえることもできますが、今日はそんなことをいたしません。あの鳥を捕まえてみせないのだ？」と、子供は答えました。

「なんで、おまえは捕まえてみせないのだ？」

「私は、ただ赤い鳥をここへ呼んだばかりです。」

「捕まえてみせなければ、金をやらないぞ。」と、群衆は口々に叫びました。

「赤い鳥を呼んでみせろというだけの約束であったのです」と、子供は答えました。けれどみんなは、口々に勝手なことを喚いて、承知をしませんでした。

「手に捕まえてみせなけりゃ、金をやらない。」と、酒に酔った男もいいました。

「私は、お金はいりません。そのかわり、今夜この町へ、黒い鳥をたくさん呼んでみせましょう。」と、子供はいいました。

黒い鳥という言葉は、なにか不吉なことのように、みんなの耳に聞かれたのです。けれど、だれも心から、ほんとうに信ずるものはありませんでした。なんでおまえにそんなことができるものか？

この赤い鳥の飛んできたのは、偶然だったろうといわぬばかりの顔つきをして、この汚らしい子供の姿を見守っていました。

そのとき、だれか、小石を拾って、電信柱の頂に止まっている赤い鳥を目がけて、投げました。赤い鳥は驚いて、雲をかすめて、ふたたび夕空を先刻きた方へと、飛んでいってしまいました。

子供は、しょんぼりとそこを立ち去りました。この哀れな有り様を見た若者は、群衆を憎らしく思いました。自分も困っていたのですけれど、まだわずかばかりの金を持っていましたので、その金の中から幾分かを、子供に恵んでやりました。子供は、たいそう喜んで幾たびも礼をいいました。そして、忘れまいとするように、じっと若者の顔を見上げていました。

その晩のことであります。空はいい月夜で、町の上を明るく昼間のように照らしていました。どこからともなく、口笛の声が起こりますとたちまちの間に、黒い鳥が、たくさん月をかすめて、四方から飛んできて、町の家々の屋根に止まりました。

町の人たちは、みんな外に出て、この黒い鳥をながめました。そして、こんな鳥が、どこから飛んできたのだろうと怪しみました。

しかし、今日の暮れ方、町で、あの汚らしいふうをした、髪の毛ののびた子供が、みんなからからかわれていた有り様を見た人たちは、あの子供がだまされたために、復讐をしたのだろうということを知りました。なんという名の鳥か、だれも、この黒い鳥を知っているものがありませんでした。その鳥は、からすよりか、形が小さかったのであります。その鳥は、黙っていました。そのうちに、また、一羽残らず夜のうちに、どこへか飛んでいってしまいました。町の人たちは、なにか悪いことがなければいいがと、おそれていま

した。

「あの汚らしいふうをした乞食の子は、悪魔の子だ。見つけしだいにひどいめにあわせて、この町の中から追い払ってしまえばいい。」と、ある人々はいっていました。

数日後のこと、若者は、雇われ口を探しながら歩いていますと、先日の汚らしいふうをした子供が、職人体の男にいじめられているのを見ました。

「おまえは、どこから、この町へなどやってきたのだ。このごろは町にろくなことがない。火事があったり、方々でものを盗まれたりする。なんでも、口笛を吹く子供があやしいというわさだが、おまえは口笛を吹くか？　はやく、どこかへいってしまえ。」と、男は子供をにらみつけて、胸のあたりを突いて、あちらへ押しやっていました。

子供は、黙って、うつむいていました。これを見た若者はそばへやってきました。

「かわいそうなことをするものでありません。この子供は、あなたに悪いことをしましたか？　口笛を吹くということが、どうして悪いのですか？」と、若者は、職人体の男をなじりました。

職人体の男は、振り向いて、

「この子は、悪魔の子です。この子供が町にはいってからというもの、ろくなことがない。」といいました。

「そんな理由のあるはずがありません。私は、それを信ずることができません。」と、若者はいいました。

職人体の男は、返す言葉がなく、あちらにいってしまいました。まもなく、五、六人連れの乱暴者がやってきました。そして、いきなり、汚らしいふうをした哀れな子供をなぐりつけました。

「おまえだろう、口笛を吹いて、夜中に、黒い鳥を呼んだりするのは？　火をつけたのも、おまえにちがいない。また、方々へ泥棒にはいったのも、おまえにちがいない。」と、彼らは口々にののしりました。

このとき、子供は、なんといって弁解をしても、彼らはききいれませんでした。そして、つづけざまにに子供をなぐりつけました。これを見た若者は、あまりのことに思って、

「なぐらなくてもいいでしょう。口笛を吹いて、鳥を呼んだことと、火事や、泥棒とが、なんの関係があるのですか？　おおぜいで、こんな子供をいじめるなんてまちがってはいませんか。」と、若者は、彼らの乱暴を止めようとしていました。

彼らは、これを聞くと、かえってますます怒りました。

「なにもおまえの知ったことじゃない。おまえは、この小さい悪い奴の仲間なのか？　生意気な奴だからいっしょになぐってしまえ！」といって、彼らは、若者の手や、足や、顔や、頭を、かまわず思うぞんぶんになぐりつけました。

若者の鼻からは、血が流れました。そして、子供と若者の二人は、これらの乱暴者から、ひどいめにあわされました。彼らは、思うぞんぶんに二人をなぐると、

「さあ、さっさと早くこの町から、どこへでもいってしまえ。まごまごしていると、また見つけて、こんどは許しておかないから。」といい残して、これらの乱暴者は去ってしまいました。

子供は、若者に二度助けられましたので、どんなにか、ありがたく感じたかしれません。若者が、自分を助けるために、鼻から血を

出したことを知ると、ただすまなく思って、幾たびも礼を申しました。

「そんなに、お礼をいわれると困ります。私は、良心が、不正を許さないために、戦いましたばかりです。」と、若者は答えました。

二人は、とぼとぼと話しながら、町を出はずれて、あちらに歩いていきました。

「これから、あなたは、どこへおゆきなさいますか。」と、子供は、若者にたずねました。

「私はいままで、ある工場で働いていましたが、病気になったために、その工場から出されました。そして行き場がなく、毎日雇われ口を探しているのです。」と、若者は答えました。

すると、子供は、

「私は、山にいたとき、口笛を吹いて、いろいろな珍しい鳥を、捕まえることを覚えました。その珍しい鳥の一羽を持ってあちらのにぎやかな港にいって、金のある人たちに売れば、困らずに暮らしてゆくことができるのです。しかし、鳥をほんとうにかわいがる人は少ないのです。鳥がかわいそうでなりませんから、鳥を捕って売ることはいたしません。私は、独りでさびしいときには、いままで、いろいろな鳥を呼んで、その声をきくことを楽しみにしました。また、私は、これから西にゆきますと、広いりんご畑があって、そこでは人手のいることを知っています。そのりんご畑の持ち主を、私は、まんざら知らないことはありません、その主人に、私は、あなたを紹介しましょう。そして、私も、あなたといっしょに働いてもいいと思います。これから、二人は、そこへいって働こうじゃありませんか。」といいました。

若者は、これをきいて、たいそう喜びました。そして、二人は、西の方にあるりんご畑をさして旅をいたしました。

二人は、りんご樹の手入れをしたり、栽培をしたりして、そこでしばらくいっしょに暮らすことになりました。二人のほかにも、いろいろな人が雇われていました。若者は、金や、銀に、象眼をする術や、また陶器や、いろいろな木箱に、樹木や、人間の姿を焼き付ける術を習いました。

りんご畑には、朝晩、鳥がやってきました。子供は、よく口笛を吹いて、いろいろな鳥を集めました。そして、鳥の性質について若者に教えましたから、若者は、人間や、自然を彫刻したり、また焼き画に描いたりしましたが、鳥の姿をいちばんよく技術に現すことができたのであります。

しかし、二人は、幾年かの後に、また別れなければなりませんでした。子供は、青年になりました。そして、若者も年をとりましたから、二人は、もっと広い世の中に出ていって、思った仕事をしなければならなかったからです。

「私は、汚らしいふうをして、町の中をうろついていたときに、あなたに助けられました。あなたは、自分の身を忘れて、私を救ってくださいました。」と、その時分子供であった青年はいいました。

「ほんとうに、もう思い出せば幾年か前のことであります。私は、病気をして職を失っているときに、あなたにあって、このりんご圃へつれられてきました。そして、ここで幾年か月日を過ごしました。私は、ここにきたがためにいろいろの技術を覚えることができました。これから、また方々を渡って、もっといろいろのことを知ったり、見たいと思います。」と、当時の若者は、もういい働き盛りに

なっていて、こう答えました。

「おたがいに、この世の中から、美しい、喜ばしいことを知りましょう。私は、あなたが、私のために乱暴者からなぐられて、血を流されたことを一生忘れません。」

「いえ、いつかも、いいましたように、けっしてあなたのためではありません。たとえその人があなたでなくても、だれであっても、弱いものを、ああして乱暴者がいじめていましたら、私は、良心から、命を投げ出して戦ったでしょう。」と、昔の若者はいいました。

「みんなが、そのような、正しい考えを持っていましたら、どんなにこの世の中がいいでしょう？　私は、この話をみんなに知らしたいと思います。私は、珍しい鳥をあなたにあげますから、いつまでも飼ってやってください。そして、私を忘れずにいてください。」と、昔の子供はいいました。

口笛を上手に吹く彼は、山の方へはいっていきました。そして、どこからか、一羽の珍しい鳥を捕まえてきました。

「なんという鳥ですか。」と、年上の若者がきくと、

「どうか、あほう鳥という名をつけておいてください。この鳥をあなたにさしあげます。」と、年若の子供は答えた。

二人は、ついに南と北に別れました。

それから、幾十年……たったことでしょう。ある町の二階を借りて、年とった男が、鳥と二人でさびしい生活をしていました。

男は頭の髪が半分白くなりました。鳥も年をとってしまいました。男は、鳥の焼き画を描くことや、象眼をすることが上手でありました。終日、二階の一間で仕事をしていました。その仕事場の台の前に、一羽の翼の長い鳥がじっとして立っています。ちょうど、それは鋳物で造られた鳥か、また、剥製のように見られたのでありました。

男は、夜おそくまで、障子を開け放して、ランプの下で仕事をすることもありました。夏になると、いつも障子が開けてありましたから、外を歩く人は、この室の一部を見上げることもできました。

ちょうど隣の家の二階には、中学校へ、教えに出る博物の教師が借りていました。博物の教師は、よく円形な眼鏡をかけて、顔を出してこちらをのぞくのであります。

博物の教師は、あごにひげをはやしている、きわめて気軽な人でありましたが、いつも剥製の鳥を、なんだろう？　ついぞ見たことのない鳥だが、と思っていました。男が、気むずかしい顔をして仕事をしているので、つい口を出さずにいましたが、ある日のこと、教師は、

「あれは、なんという鳥の剥製ですか？」と、唐突にききました。

下を向いて仕事をしていた男は、隣の屋根から、こちらを向いて、みょうな男が顔を出してものをいったので、気むずかしい顔を上げてみましたが、急に笑顔になって、

「やあ、お隣の先生ですか。さあ、どうぞ、そこからお入りください。」と、男はいいました。

男は、その人が、学校の先生であるのを、前からものこそいわなかったけれど、知っていたのです。

「なんという鳥ですか？　珍しい鳥ですな。」と、先生は、はいろうともせずにたずねたのであります。

「あほう鳥といいます。」と、男は答えました。

「あほう鳥?」といって、先生は、聞いたことのない名なので、びっくりしたように目を円くしました。

「なんにしてもいい剥製ですな。」と、先生は、ため息をもらしました。

「いや、剥製ではありません。生きているのです。もう年をとったので、いつもこうして眠っています。」と、男は答えました。

先生は、不思議なことが、あればあるものだと、ふたたび、びっくりしました。この先生もどちらかといえば、あまり人と交際をしない変人でありましたが、こんなことから、隣の男と話をするようになりました。

ある朝、あほう鳥が鳴きました。男は、なにかあるな? と胸に思いました。

はたして、隣の先生がやってきました。そして、大事に扱うから、ちょっとあほう鳥を学校へ貸してくれないかと頼みました。男は、あほう鳥をひとり手放すのを気遣って、自分も学校まで先生といっしょについていきました。

こんなことから、男は、多数の生徒らに向かって、昔、南のある町を歩いているときに、子供を助けたこと、それから、その子供といっしょに働いたこと、子供は、どんな鳥でも自分の友だちにすることができたこと、この鳥は、その青年が分れるときにくれて、いままで長い月日の間を、この鳥と自分は、いっしょに生活をしてきたことなどを、物語ったのであります。

それから、正直な「鳥の老人」として、この町の付近には評判されました。この人の、鳥の焼き画や象眼は、急に、名人の技術だとうわさされるにいたりました。

暗い、夜のことであります。この年とった男は、ランプの下で仕事をしていますと、急にじっとしていたあほう鳥が羽ばたきをして、奇妙な声をたてて、室の中をかけまわりました。いままでこんなことはなかったのです。

「おまえは、気でも狂ったのではないか!」と、男は、鳥に向かっていいました。けれど、鳥は、なかなかおちつくようすはありませんでした。

「先生に、きてみてもらおう。」と、男は、もうこのごろでは、親しくなった、隣の先生を呼んだのでありました。

「鳥は、ものに感じやすいというから、今夜、変わったことがあるのかもしれない。あるいは地震でもな……気をつけましょう。」と、先生は、しきりに騒ぐ鳥を見ながらいいました。

はたして、その夜、この町に大火が起こりました。そして、ほとんど、町の大半は全滅して、また負傷した人がたくさんありました。

この騒ぎに、あほう鳥の行方が、わからなくなりました。男はどんなにか、そのことを悲しんだでしょう。彼は、焼け跡に立って、終日、あほう鳥の帰ってくるのを待っていました。しかし、とうとう、鳥は帰ってきませんでした。煙に巻かれて、焼け死んだものか、南の故郷に、逃げていったものか、いずれかでなければなりません。

「私は、べつに、この町にいなければならない身ではないのです。もう一度、鳥のすんでいた国にいってみようと思います。」と、男は、先生にいいました。

「そうですか、そんなら、私も、あなたといっしょにいって、その口笛の名人について、珍しい鳥の研究をいたします。」と、先生

がいいました。

こうして、男と先生は、旅に出かけました。遠くの空に、白い雲が漂っていました。三人が落ち合った日、どんな話を、たがいに睦まじく語り合うでありましょう。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　3」講談社
　　1977（昭和52）年1月10日第1刷
　　1981（昭和56）年1月6日第7刷
初出：「童話」
　　1923（大正12）年9月
※表題は底本では、「あほう鳥《どり》の鳴《な》く日《ひ》」となっています。
※初出時の表題は「阿呆鳥の鳴く日」です。
入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班
校正：本読み小僧
2012年9月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

あほう鳥の鳴く日

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/